

Title	京大東アジアセンターニュースレター 第633号
Author(s)	
Citation	京大東アジアセンターニュースレター (2016), 633
Issue Date	2016-08-22
URL	http://hdl.handle.net/2433/216372
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

2016 年 8 月 22 日発行 第 633 号

CONTENTS

アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ	2
中国における食料安全保障の現状と政策的動向 王 鳳陽	3
読後雑感：2016 年 第 20 回 小島 正憲	5
【中国経済最新統計】	10



アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター支援会

アジア自動車シンポジウム 2016

新興国における部品現地調達を考える

—部品国産化ライフサイクルを一つの視座として—

■京都会場 2016 年 11 月 5 日(土) 13 時

京都大学経済学部三番教室(法経東館 2 階)

■東京会場 2016 年 11 月 7 日(月) 13 時

京都大学東京オフィス(新丸の内ビルディング 10 階)

13:00-13:20 挨拶

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅 純二郎
東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点長 丸川 知雄

13:20-14:40

問題提起: 部品国産化ライフサイクル 京都大学 経済学研究科 教授 塩地 洋

14:40-15:10

サプライチェーンの複雑化と深層の現地化 東京大学 経済学研究科 教授 新宅 純二郎

15:30-16:00

日系サプライヤーの現地化基本戦略 立命館大学 経営管理研究科 准教授 佐伯 靖雄

16:00-16:30

現地 2 次サプライヤーの技術能力—深化を制約するか 桜美林大学 経営学研究科
教授 井上 隆一郎

16:30-16:50

総括コメント 東京大学 社会科学研究所 教授 丸川 知雄

16:50-17:00

閉会挨拶 京都大学 経済学研究科 准教授 田中 彰

17:10-18:30

懇親会 参加費 2000 円(支援会会員は無料)

参加の御申込は、塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp 宛に、①会場名、②氏名・所属、③懇親会出欠を御連絡ください。シンポジウムの参加費は無料、懇親会は 2000 円です。ただし支援会会員は懇親会も無料です。

東京会場は定員 90 名、京都会場 200 名です。お早めにお申し込みください。

なお東京会場は会場が小さいため、御申込は支援会会員のみとさせていただきます。

支援会入会につきましては塩地までお問い合わせください。

中国における食料安全保障の現状と政策的動向

立命館大学大学院博士後期課程

王 鳳陽

1. 食料安全保障の考え方

1996 年の世界食料サミットでは、食料安全保障は、「すべての人が、いかなる時にも、彼らの活動的で健康的な生活のために必要な食生活上のニーズと嗜好に合致した、十分で、安全で、栄養のある食料を物理的にも経済的にも入手可能であるときに達成される」と定義されている。最近では、食料安全保障に関する倫理及び人間の権利（人間の安全保障）に関する要素に焦点が与えられるようになってきており、供給可能性、入手可能性、安全性・栄養性、安定性という 4 つの要素が提起されている。さらに、現代の食料安全保障では、供給量と質の問題だけでなく、国民の「安心」の問題も重要な視座の一つとなっている。

「食料」の概念について、中国語では「糧食」、「食糧」、「食物」があり、国際的な慣習に従って、穀物と油糧種子に分けることを初めて明示するとともに、主食用穀物のコメと小麦の位置づけをトウモロコシなどの飼料穀物、大豆などの油糧種子と明確に分けた。

2. 中国の食料需給構造と政策の変遷（安定面）

1996 年 10 月に中国が初めて『中国食料白書』を出し、同年 11 月にローマで開かれた世界食料サミットに「食料の 95%自給」という食料安保宣言を発信した。食料生産目標に対して「省長責任制」を導入し、1999 年以前は農家の余剰食料も含めて政府が定めた保護価格で買い取る保護価格政策が採られ、生産過剰の状態となった。WTO 加盟（2001 年）や穀物の過剰在庫に対処するため保護価格制度を段階的に廃止する自由化政策が採られたため、食料価格が下落して食料生産が落ち込み、需給の逼迫を招くこととなった。2004 年から「三農政策」で農家に補助金交付等を行い、積極的に食料増産を進める生産補助政策が実施され、食料生産は 13 年連続して増加した。

一方、この間、食料輸入も急速に拡大した。消費面からみれば、都市化の急速な推進による都市人口の増加及び都市部における食生活の多様化に伴い、主食用穀物の消費が減少したが、肉類や乳製品、卵など畜産物消費の拡大を背景に、家畜の飼料及び飼料穀物への需要が急速に伸び、食料総消費量が増加した。

そのため、食料輸入の増加は不可避となった。食料需給構造の現状に関しては、主食用穀物の総生産量と総消費量が相対的に均衡を維持しているが、飼料穀物などの「雑穀・雑糧」の純輸入が急増している。

3. 中国における食の安全と政策的動向（安全面・安心面）

中国で食品安全問題が多発した根本的な原因は、食品メーカーのモラルの低下、監督管理体制の不備、消費者の食品安全に関する知識・意識不足の3点であると考えられる。近年、中国政府は食品の衛生や安全を高度に重視し、食品安全確保の法整備及び行政体制改革はかなり進んでおり、食品の安全性・品質管理能力は徐々に「全体的に安定しており、良い方向に向かっている」。中国の国家衛生と計画出産委員会の統計データによると、1991～2015年において、中国における食中毒の件数は9割以上減少し、被害（中毒人数、死亡人数）も大幅に減少した。また、『中国食品安全発展報告』（2010～2015年）によれば、中国農業部が実施した食品安全の定期検査の結果から、全体として食品安全性の水準は着実に上昇した。一方、食品の客観的安全性の向上を図ると同時に、主観的不安をいかに解消するか、あるいは食品安全に対する消費者の信頼をいかに構築するかは中国における喫緊の課題となっている。

4. 中国における食料安全保障戦略の転換

中国の食料安全保障の新戦略には主に2つの歴史的転換・特徴がある。まず、2013年末に、目標を従来の「食料の95%自給」の絶対自給から主食用穀物の「絶対的自給」に転換し、主食以外の食糧は可能な範囲で国内生産するものの、不足分は輸入に置き換える方針を示した。これは、増産と輸入の戦略的結合ともいえる。また、中国の食料安全保障政策の変遷において、食料の量的安全の重視から量的安全（安定性）と質的安全（安全性）の「両立」の重視へと歴史的な転換が行われたと考えられる。

また、中国において拡大された食農システムは、多投入型の農業生産、複雑な加工過程、エネルギー浪費型の流通体系によって、環境への負荷が回帰的に農業の発展、食の安全に大きな影響を及ぼしている。これからは、食・農・環境を結びつけて、中国における「持続可能な農業生産」と「環境の保全」や「食の安全・安心・信頼」との両立を目指していくことが重要だと考える。

読後雑感：2016年 第20回

09.AUG.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事
株式会社小島衣料オーナー
東アジアセンター外部研究員
小島正憲

1. 「どう生きますか 逝きますか」
2. 「死すべき定め」
3. 「平田篤胤」
4. 「家裁調査官は見た」
5. 「もう人と同じ生き方をしなくていい」

1. 「どう生きますか 逝きますか」 週刊ダイヤモンド：8／6号

副題：「介護、墓、葬式…終活本では分からない死への心構え 死生学のススメ」

週刊ダイヤモンドの今週号が、「どう生きますか 逝きますか」と題し、高齢者向けの特集を組んでいる。つまり、「死」は超高齢社会日本の差し迫った課題であり、その話題が多くの高齢者を惹き付けるとのことなのであろう。本特集は、「死生観はありますか？ 墓・葬式は必要ですか？ 働き方を変えませんか？ 家族の最期、考えませんか？ 延命を望みますか？ 臨死体験って本当ですか？」などという問いを發し、それぞれに答えを出している。しかしこの特集を読んでも、私のテーマである「楽しく死ぬ」については、ここからはそのヒントすら見出せなかった。

この特集でも、五木寛之氏が登場し、「世界は利口な日本人が使用済み核燃料と使用済み人的資源をどうするかに注目しているのではないのでしょうか」と、面白いことを語っている。また、「死に対する恐怖の一つは自己の消滅なんだろうけど、生命は循環し、個が消滅しても生は残ると考えています」、「どう死ぬかというのは思想の問題、昔は宗教が担ったけど、これからは哲学が役割を果たすのかもしれない」、「孤独死が悲劇的に語られていますが、親鸞も法然も鴨長明も孤立した暮らしや隠遁を選んだ。孤独を楽しんで去っていけないものか。そう思っている人、実は多いと思います」

などと書いている。私もこれらの五木の主張はよく分かるし、自らが死の哲学を生み出さねばならないと思っている。

特集の中には、「日本人の死生観は神道・仏教・唯物論から成っている」という一文があって、それが年表形式でわかりやすく説明してある。なお、この年

表の中には、「武士道的（死＝美德）」という項も小さく書き込んである。私は、現代の日本人の死生観の中には「唯物論」があり、「日本経済は工業生産へと舵を切り、農耕は次第に影を潜める。そんな中、“生＝有”“死＝無”と科学的かつ合理的に捉えるようになる。戦後、高度経済成長で人の死がタブー視され、マルクス主義が台頭する中で唯物論的な死生観として形成された」という指摘に、あらためて考えさせられた。たしかに、私を含めた団塊の世代は、マルクス主義の影響を色濃く受けており、「死＝無」という思想、つまり「死生観」を持っているものが多い。私も、ここまで唯物論者として生きてきたわけだから、最後まで、その姿勢を全うし、「楽しく死に、無に帰す」という哲学を生み出したいと思っている。

また宗教ごとの「あの世」の考え方も、一覧表になっており、おもしろい。さらに、歴史上の人物の「逝きざま」が8つのパターンで示されており、これもまたおもしろい。さしずめ私は、「自己陶醉型」か。

2. 「死すべき定め」 アトゥール・ガウンデ著 原井宏明訳 みすず書房 2016年6月24日

帯の言葉：「私たちは豊かに生きることに精いっぱい、“豊かに死ぬ”のために必要なことをこんなにも知らない」

本書の著者は米国人で、老人医療に携わる医師である。また両親は米国に移住したインド人で、共に医師である。したがって本書では、米国とインドの高齢者医療の現状が、生々しく書き込まれている。私は本書から、日本の抱えている超高齢者問題が、米国やインドともほぼ共通しており、暗中模索を続けている最中であるということを学んだ。

本書で著者は、「医学教育の目的は命を救う方法を教えることであって、命が尽きるのを手助けすることは関係がない」、「治せないということに対して十分な答えを医師が持ち合わせていないことがトラブルや無神経さ、非人間的な扱い、言語を絶する苦しみの原因になっている」、「年金のおかげで、退職後も可能な限り高齢者が自立した生活を続けられるようになった。しかし、限りある人生の最後の老衰段階に対しては年金は何もできなかった」、「歴史的な大変化が起きつつある。米国でも世界全体でも老人収容所で惨めさを味わったり、病院で死んだりする以外のやり方が増えてきた。しかし、まだ落ち着いたとは言えない時期である。施設の中での加齢と死について、人々はノーと言うようになったが、新しい規範が確立されたわけではない。私たちは移行期にひっかかっているのである」と書き、米国における高齢者医療の問題点を浮き彫りにしている。

さらに著者は、「何が医療者の仕事なのかについて私たちは誤った認識をずっとひきずっている。自分たちの仕事は健康と寿命を増進することだと私たちは考えている。しかし、本当はもっと大きなことだ。人が幸福でいられるようにすることだ。そして、幸福でいるとは人が生きたいと望む理由のことである。こうした理由は、終末期や要介護状態になったときだけにではなく、一生を通じて必要なものだ」と書いている。つまり著者は、医師の立場から哲学者や宗教家の位置にその足場を移しているのである。著者は本書の中で、心理学者マズローの「人間の動機づけに関する理論」を紹介し、人間にとって「自己実現欲求」がもっとも高次の欲求だとされてきたが、それを高齢者に当てはめるのには、無理がある。高齢者が命の限界を見定めたとき、明らかに欲求は変化してくると言い切る。しかも著者は、米国人であり医師であった父親の死後、その遺言通り、遺体をガンジス河に葬った。父親の最期をヒンドゥー教に委ねたのである。これらはまさに、著者が新たな哲学の誕生を希求し、宗教に現状打開を求めている証左なのだろう。

3. 「平田篤胤」

吉田麻子著 平凡社新書 2016年7月15日

副題 : 「交響する死者・生者・神々」 帯の言葉 : 「死者はいま、どこにいるのか」

副題と帯の言葉につられて、この本を購入し読んでみた。著者の吉田氏は、「平田篤胤は人間の魂は死後、“幽冥界”に行く」と説いている、「幽冥界は、人間の世界から遠く離れたところにはない。この地球上の、われわれの日常に隣り合わせるように、また重なるようにして存在している。目には見えないが、いわば地球上のどこにでも満ちている。そして大国主神が治めるその幽冥界から、死者は生者をつねに見守っている」、「平田篤胤がこのような幽冥界の存在を唱え、死という人間にとって最も恐ろしい出来事の後には待っているのが、私たちにとって親しみのあるこの国土上の別世界であるということを明言したことは、歴史的にたいへん大きな意義がある」と書いている。たしかに、この平田篤胤の思想は日本人の死生観に、一定の影響を与えたように思える。

さらに吉田氏は篤胤の学究スタイルについて、「篤胤は自説を講釈するだけでなく、当地域に実際に散らばっているさまざまなモノや奇談に興味を寄せ、それを実際に触ったり、拾ったり、夢に見たりしながら、周囲に集うたくさんの人々を引き込んでその土地の神々と対話するのである。実際の場所に足を運び、土地の人の話を聞き、文献上の学識と結びつけながら、“あちら側の世界”を探ってゆこうとする篤胤の態度は、まさに近世という時代特有の“不思議”

へのアプローチそのものであった」と書いている。この篤胤の学究スタイルを慕って、彼の塾には500名以上の塾生が集っていたという。私は本書で、平田篤胤という国学者が、いわば現場重視の学究スタイルを貫いていたということ始めて知り、あらためてこの分野も面白いと思った。しかし残念ながら私には、これからこの分野の勉強を始めるというわけにもいかず、自らの浅学を悔やむばかりである。

4. 「家裁調査官は見た」 村尾泰弘著 新潮新書 2016年7月20日

副題 : 「家族のしがらみ」 帯の言葉 : 「人生最凶の人は肉親だった」

本書の帯の言葉は強烈だが、中身はそれほど過激なものではない。私は数か月前に、これから巷では家族にまつわる論争が起こるだろうと予想したが、本書も現代社会における「家族」についての分析である。ことに著者が、家裁調査官というユニークな職業に就いているだけに、本書には具体例が豊富に載せられており、面白い。しかも著者は、家族を従来のモラルにとらわれることなく、その否定的な面に焦点をあてて書いており、その視点は貴重である。

昨今、世界中でテロという名の究極の暴力行為が起きているが、村尾氏は本書で、「家族のカウンセリングをしていると、暴力的な問題行動によく出会う。暴力が問題になっている子どもは、ほとんどが家庭内で親から暴力を受けている子どもたちだ。体罰やそれに近い対応を受け続けると、人間は暴力で問題解決をすることを学習してしまうのだ。予防策は、親も言葉を大切にすることだ。子どもが暴力的になっている時は、“今怒っている” “腹が立っている” と言葉で表現するように導いてみよう。そして、話合う。感情を言葉に換えて、その言葉をコントロールすることによって、感情を制御するのである」と書いている。これも有力な解決方法の一つであろう。

また村尾氏は、「若年夫婦の離婚事例に接すると、この人たちはこれまでに深い人間関係を持たないで成人になってしまったのではないかと痛感させられることが多い。いわば深い人間関係が扱えない、人間関係が切れやすいという点では児童から若者まで、まさに共通しているのだ」と書いている。残念ながら、若者たちの間でのスマホの大流行が、生身の人間の交流を遮断してしまい、ショートメッセージでの単純な意志交換だけで済ませ、若者たちをますます「深い人間関係が扱えない」状況に追いやってしまっている。このような深刻な事態は、これからますます拡大していくだろう。

5. 「もう人と同じ生き方をしなくていい」 下重暁子著 海竜社 2016年7月15日

副題 : 「私の人生心得帖」 帯の言葉 : 「自分らしさをつらぬく。
人との違いが個性となる！」

本書は書き下ろしではなく、下重氏の過去の著作からの抜粋である。したがって新鮮な主張はほとんどない。

下重氏は本書の最後を、「自分がどう死にたいか、死に方を考えるのは決して私にとっていやな作業ではない。自分の死の演出を自分らしく考えておきたい。夕暮れ時に死ぬ。私はそう決めている。暁子という名は、暁に生まれたからだが、私は陽が落ちて闇が近づき街にほっと灯がつきはじめる時間帯が好きだ。季節は晩春か初秋、なぜなら私は山吹や萩といった垂れ下がる花が好きなのだ。白山吹や黄山吹、白萩や紅萩の中にさりげない姿の私の写真」、「こんなことを考えるのはまだ死を現実とうけとめていない証拠。それが現実になるまでにまだ余裕がある。それまでどう生きてゆくか」という文章で締め括っている。

本書の記述には、それを実践しようとしても、無理なのではないかと思われる個所もある。たとえば、「年をとることは極端にその人の特徴が出てくることでもある。頑固な人はますます頑固に、狭量な人はますます自分の殻に閉じこもってしまう。自分から扉を閉ざすと人はどんどん去っていく。できるだけ胸を開いて柔軟に人を受け入れることが、器量ある証拠なのだ」と書き、他人との接点を重視しているが、別の個所では、「自分で考えよう。考えるくせをつけよう。道を聞くのは圧倒的に女が多いという。男は地図を見、自分で見つけようとし、意地になって探し回る。自分で考える時間を持つこと、立ち止まって自分をみつめる。他に連なっていてはその時間がない」と書いている。残念ながら、柔軟思考と独立志向を両立させることは、かなり難しい。下重氏はその難しさに気がついていないようであり、したがってそれを両立させる方法論も、本書には書き込まれていない。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016年												
1月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。